

# 青陵

第112号  
北海道教育大学  
青陵会

(北海道教育大学岩見沢校同窓会)

会長 早瀬 公平

印刷 北海道社会福祉事業団福祉村  
(TEL.0126-45-2300)



もくじ  
○巻頭言……1 ○總會報告・周年行事について…2～3 ○令和5年度役員…3  
○研修活動報告…4 ○恩師と学生のこの頃…5 ○各学科の活動状況…6～7  
○新青陵会員の抱負…8 ○退職支部長からのメッセージ…9～12 ○先輩を訪ねて…12  
○学生生活支援事業・編集後記…13

(題字は岩教大、藤根信章元教授の揮毫によるものです)

## 「多くの困難を乗り越えて 創立一〇〇周年を祝う」

北海道教育大学青陵会 会長 早瀬 公平



今年、新型コロナウイルス禍により三年間中止が続いた総会を四年ぶりに開催することができ、心から嬉しく思います。議事進行も円滑に行われ、無事終了しましたことに、遠方より参加して下さった各支部代表の皆様へ深く感謝を申し上げます。

本年は、青陵会創立一〇〇周年を迎える記念すべき年です。一〇〇年前の大正十二年に実業補習学校教員養成所として開校した母校は、時代の変化に対応しながら本道教育の発展に大きく貢献してきました。

その歴史を支えてきたのは、何よりも、卒業生である青陵会の会員の皆様です。本道教育界はもとより、各地で活躍されている諸先輩をはじめ会員の皆様のご功績に敬意と感謝を申し上げます。

私たちは、「岩見沢校の卒業生全てが青陵会の会員である」という考え方のもと、「会員相互の親睦と資質の向上を目指す」ことを会是として、母校の発展と、本道教育の振興に寄与することを目的として活動を

進めてまいりました。

特に近年は教員採用数の減少や新型コロナウイルス感染症の影響など、さまざまな困難に直面しながらも、各支部や関係機関との連携を図りながら、広報活動、学生活動支援事業などを実施してきました。

また、「同窓会今後のあり方検討委員会」を設置し、組織改善や財政基盤の強化などについて議論を重ねてきました。

当初の計画では、改革の具体案を今総会でお示しをして承認をいただいた後、およそ来年度を目途に全面実施の予定でしたが、まだ若干の議論が不足していることや、この秋に開催される一〇〇周年記念事業の準備に集中することを優先して、今回の提案を見送ることといたしました。

まずは一〇〇周年記念事業を成功させて、その後、同窓会改革に鋭意取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

この度の記念事業の推進については、大学、同窓会、後援会の三者に

より実行委員会を組織して、実行委員長(の山本教授(キャンパス長))が発案の「地域とともにあゆみ」ともにつくる「往古来今」をスローガンに準備を進めています。

特に、記念式典は大学の先生方や職員の皆様、祝賀会は青陵会が、というように役割分担をしたことは、これまでにない画期的なことです。

また、学生諸君がロゴマークや記念賛歌等の作成、記念の演奏会や作品展など、様々な場面での協力と参加により、華を添えて下さいます。

さらに、岩見沢市開庁一四〇年、市制施行八〇年を迎えるという、トリプルに祝賀が重なり、岩見沢市も加わって、九月二十三日を中心に記念行事が開催されることになりました。

私は、これまでに、青陵会創立七〇・八〇・九〇周年の祝賀行事に参加した記憶がありますが、大学はもとより、岩見沢市も加わるという、これまでとは趣向を異にする記念行事になると予想され、大変楽しみにしています。

「往古来今」とは、綿々と続く時間の流れ、また、昔から今まで。「往古」とは過ぎ去った昔、「来今」とは今から後のことを言い、一〇〇年の歩みをもとにこれからも益々発展していこうという願いが込められているようです。

令和五年度 北海道教育大学青陵会総会報告

「創立一〇〇周年の節目の年を迎えて」

北海道教育大学青陵会理事長 藤田 祐二

一 はじめに

昨年度に引き続き理事長を務めさせていただき藤田祐二と申します。本年度も与えられた役割を果たしてまいりたいと考えておりますので、各会員の皆様には、一層のご理解とご協力を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

さて、令和五年度総会については、去る五月二十日（土）、岩見沢市のホテルサンブラザで、集合形式で開催することができました。

当日は、二十一支部中、十二支部の出席をいただき、札幌支部の佐藤達也支部長、石狩支部の吉田光岐支部長の進行により議事が進められ、令和四年度会務報告、会計決算報告、監査報告、令和五年度活動方針及び会務計画案、会計予算案のすべてが承認されました。また、役員改選について、副会長五名が交代することが承認されました。

以下、総会の概要をお知らせしますので、ご一読ください。

二 令和四年度の反省

① 事務局

ア 「創立一〇〇周年を祝う会

実行委員会」を大学と一体となつて立ち上げ、記念式典や

事業の内容等を検討

イ 「同窓会今後の在り方検討委員会答申」を踏まえた会則

の見直しに向け、各支部からの意見を集約

ウ ホームページの更新による積極的な情報発信

② 総務部

ア 退職会員の意識の変容に向けた啓発

イ 大学の卒業式・入学式における祝文の送付及び同窓会入会に向けた働きかけの強化

③ 研修部

ア 総会と研究大会の同時開催（新型コロナウイルスにより中止）

イ 研修誌「望岳（III）」の頒布

④ 会員・組織部

ア 期別同窓会会員名簿の作成に係る方針の確定及び各支部との連携によるデータの集約

⑤ 広報・情報発信部

ア 会報「道青陵」一一〇号、一一一号の発行

イ ホームページの改善と充実

⑥ 大学連携部

ア 学生活動支援事業の推進

イ 学生幹事会の実施と新規卒業生の同窓会入会促進  
以上が令和四年度の主な取組です。

三 令和五年度の活動計画

① 事務局

ア 「創立一〇〇周年を祝う会実行委員会」を中心とした記念行事・事業の実施

イ 「同窓会今後の在り方検討委員会答申」を踏まえた会則の見直しに向けた取組の加速

ウ ホームページでの積極的な情報発信

② 総務部

ア 退職された会員への会報の送付

イ 大学の卒業式・入学式における祝文の送付及び同窓会入会に向けた働きかけの強化

③ 研修部

ア 研修誌「望岳（III）」の継続頒布

イ 専門的教育職員育成のための特別研修会の実施

④ 会員・組織部

ア 期別同窓会会員名簿の作成

イ 組織実態調査の検討

⑤ 広報・情報発信部  
ア 会報「道青陵」一一二号の

発行

イ ホームページの充実

⑥ 大学連携部

ア 学生活動支援事業の継続

⑦ 会計

ア 会費納入の働きかけ

イ 経費節減の推進  
以上が令和五年度の活動計画です。

新型コロナウイルス感染症が、五月八日をもって二類感染症から五類感染症に移行されたこと、新型コロナウイルスの感染状況が心配されるような状況ではなかったことなどを踏まえ、四年ぶりに現地開催としたところで





教育懇談会の様子

す。何かとお忙しい中、足をお運びくださいましたことに、改めて感謝を申し上げます。

総会後に実施しました教育懇談会では、岩見沢市長の松野哲様、岩見沢校キャンパス長の山本理人様をはじめ、たくさんのご来賓の皆様にご出席をいただきました。本年は、大学及び同窓会の創立一〇〇周年に加え、岩見沢市の開庁一四〇年を迎える節目の年となります。岩見沢市と共に歴史を刻み、市民に親しまれてきた大学として、また、市の教育づくりに関わらせていただいていた同窓会として、今後も相互の連携・協力に一層努めていくことを確認する機会となったことをお伝えし、総会の報告とさせていただきます。

### 令和5年度 北海道教育大学青陵会 支部長・事務局長一覧

公務員・民間	社教主事	指導主事	高特 大	関 東	オホ ホク	根 室	釧 路	帯 広・十 勝	日 高	胆 振	空 知	渡 島	檜 山	留 萌	宗 谷	上 川	小 樽	後 志	石 狩	札 幌	支部名	支部長	事務局長
松浦靖高	斎藤佳太	因雅仁	山下秀樹	岡山武	岩瀬知範	滝泰英	志藤英樹	阿部英一	品田和輝	大熊龍也	高岸春二	浅野友善	草間留美子	金山茂樹	畑慎司	川石塚睦	加藤俊明	豊田一正	吉田光岐	佐藤達也		関敏明	
佐藤直輝	外田曉史	新栄裕	宮崎純也	御法川慎司	水野利幸	滝泰英	志藤英樹	出村聖	玉手広昭	北野雄介	中嶋利啓	浅野友善	草間留美子	豊崎東洋	嶋崎健一	鈴木一朗	本間浩平	佐々木淳	藤谷拓				

### 令和5年度 北海道教育大学青陵会役員

副理事長	理事長	副会長	会長	参 観 与 同	名譽顧問																									
米倉卓司(三・四山小)	松野岳彦(岩・明成中)	藤田祐二(岩・光陵中)	竹見秀純(檜・社教)	山下秀樹(高特大)	小田良秀(五区)	大熊龍也(四区)	浅野友善(三区)	本間正彦(二区)	豊田一正(一区)	渡邊琢磨(石狩)	星野誠一(札幌)	高岸春二(空知)	松浦靖高(信)	近田勝信(幸)	網淵秀幸(平)	早瀬公昇(昇)	東志勇(一)	高木康範(巖)	高島康巖(巖)	荒川惠三(孝)	佐藤孝平(平)	根津章(章)	我孫子章(章)	大森啓司(司)	今井信義(義)	藤原光成(成)	笠井瑞昭(昭)	笠井瑞昭(昭)	葛西明(明)	
成田秀彦(空知)	品田和輝(四区)	谷本慎司(二区)	小林大助(岩・東小)	三國均(岩・光陵中)	五十嵐史加(岩・南小)	江幡佳代(三・菅野中)	笠井賢吾(千歳・緑小)	沢井泰宏(岩・第一小)	小野寺英樹(滝・江陵中)	一ノ瀬健太郎(三・四山小)	淡谷憲一(妹背牛小)	神島亘基(砂・豊南小)	飯塚博明(深・二層中)	箕田裕(岩・第一小)	長崎卓也(芦別小)	八柳博和(赤平小)	正田博和(赤平小)	杉島亜紀(南幌小)	渡邊新一郎(芦別小)	三浦新一郎(芦別小)	小樽孝一(浦臼中)	後藤淳志(由仁小)	小林広(岩・中央小)	小好考央(雨竜小)	米倉卓司(三・四山小)	野村知史(岩・東小)	尾見秀樹(岩・美園小)	野村知史(岩・東小)	尾見秀樹(岩・美園小)	葛西明(明)

# 令和四年度研修活動報告と令和五年度研修活動の展望

北海道教育大学青陵会 研修部長 小熊 孝一

## ○令和四年度研修活動報告

令和四年度、研修部においては、全道各支部との連携を重視し、同窓のつながりを大切に取組を進めてまいりました。総会においてもご報告させていただきましたが、改めて紙面に報告いたします。主な推進事項は、次の四点になります。

(一)「会員研修会(Sセミナー)」については、研修実施内容を検討し、新型コロナウイルスの状況等から、次年度の取組への準備期間として取組を進めました。

(二)各支部と連携を図り、学校管理職研修など、研修内容の工夫改善を図りました。

(三)専門的教育職員候補者の育成に向けた、部内研修に努めました。

(四)情報提供や研修資料の提供など、各支部と連携協力し、研修の充実を図りました。

(一)については、昨年度に引き続き開催を模索いたしましたが、一〇周年記念事業の実施に向けた実行委員会が六月に開催され、協議された内容等から、会員研修ともなるであろうことが構想されたことから、

令和五年度実施に向けた準備期間とすることいたしました。

(二)と(四)については、取組の重点として、問い合わせ等あった場合には、迅速に協議し、できる対応をして参りました。管理職研修に資する想定論題の情報提供や取組の視点などを示させていただきました。また、研修誌「望岳」の頒布も支部の要請に応じて行つて参りました。

(三)については、対象となる人材をあげることではできませんでしたが、今後も各支部、会員個々との情報連携の強化に努めて参ります。

いずれにしても、令和四年度においては、新型コロナウイルスの影響を受けた形となったこと、また一〇周年記念事業実施に向けた準備の取組期間となった形となり、現下の状況を踏まえて、引き続き活動を模索する一年であつたと言えます。

## ○令和五年度研修活動の展望

まずは、五月の総会にて本研修部の令和五年度業務計画につきまして、ご承認いただき、ありがとうございます。以下、総会議案に掲載いたしました計画に基づき、令和五年度

の研修活動の展望をして参ります。

北海道教育大学青陵会の活動方針に基づき、研修活動の充実に資する次の四点の取組を推進して参ります。

(一)一〇周年記念事業での取組を通して、会員研修の充実に努める。

(二)学校管理職研修など、研修内容の工夫改善を図る。

(三)専門的教育職員受検者及び候補者の育成・研修に努める。

(四)情報提供や研修資料の提供など、各支部との連携に努める。

いよいよ令和五年度は、北海道教育大学と北海道教育大学青陵会にとつて記念すべき一〇周年の年となります。研修部としては、本事業において「事業部」担当となつていることもあり、この事業展開の充実に向けた取組に重点をおき、年一回の会員研修(Sセミナー)もこれに呼応する形で実施したいと考えております。

そういう意味で九月二十三日は周年記念の事業日であり、わたしたち会員の研修の場でもあるという形で行い、会員皆様の母校への想いを新たにし、明日からの取組への充実を図るものとしていきたいと考えております。これが研修部として、一番の重点事項と押さえております。

現時点での事業部での取組の一つとして、総会でご紹介したロゴが学

生の協力の下できあがり、各種の配布物等に掲載していくことを予定しております。このほか既に取り組みつつあるもので、

①OB・OG・在学生の活躍や活動の映像を、様々な機会に流す。八人の方々にインタビューする形で、事業部の大学の先生方、卒業生の方々のご尽力等により、鋭意制作しているところです。この映像には映像のつなぎとしてのイメージソングも制作し、我が母校のPRとして、参加された皆様にも当日、記念式典や祝賀会などでご覧いただくこととなっております。

②式典で吹奏楽の演奏を行う。一〇周年というお祝いの機運醸成として、大学の学生さん方による吹奏楽の演奏も予定しております。

今年度も研修部としては、引き続き全道各支部との連携に努め、会員の研修活動の充実に資する取組を進めてまいりたいと考えております。講師派遣や資料提供等のご依頼があれば、全道どこにでも参りますので、お声かけいただければと思います。教員会員の減少が見られ、公務員・民間の卒業生が増えつつある状況ではありますが、次なる策を構想しながら、研修の内容、在り方も見つめていきたいと考えております。



「眩いばかりの卒業生」  
芸術・スポーツビジネス  
専攻教授  
宇田川 耕一

長谷川彩さんはまさに、私の理想とする卒業生像を体現している存在です。

私は二十八年間の毎日新聞社での企業人生活を経て、十年前に大学教員へ転身した実務家教員です。勤務の傍ら進めてきた、今年で二十二になる研究者としてのキャリアを、企業人体験と共に経験した私が目指すべき大学教育とは何か。それは、学生に正解のない問いを問い続ける四年間を提供することです。

なぜなら、実社会では解答は一つとは限らず、無数の選択肢の中から、その時の「自分なりの」の最適解を探す、絶え間ない営みが要求されるからです。そのためには、教員から一方的に習う「学習・座学」から、自ら課題をみつめて考え抜いた上で取り組む「研究・実践」への進化を促すことが重要です。

よく、私は運転免許に例えて、「学科試験で満点を取っても車は一ミリも動かせない。仮免許を取って路上実習をして初めて、使える運転技術が身につく」と説明します。

さまざまなプロジェクトを座学ではなく、実際に現場で「企画から終

結（フィナーレ）まで」経験するということ。それが、卒業後に自分でハンドルを握りしめて、人生の長い道のりを、思いっきり自由に走り回るためのステップアップにつながる信じています。

私は前職の毎日新聞社で広告事業本部というセクションに長く所属していました。広告営業職としては、奇しくも長谷川さんの先輩とも言えます。一方で新聞社時代に、芸術やスポーツのイベントに携わる、企業や団体の担当者の多くが、その部署に所属になってから初めて、仕事を通して独学でノウハウを身につけていることを知りました。

思えばその頃から、大学にもそれに対応する学部や学科があれば良いのにと漠然と感じてはおりました。

私の研究室では、学生主体によるイベントの企画から実践までを、活動の中心にしています。これは、かなり難易度の高いミッションなのですが、長谷川さんの代は自由な発想で見事にクリアしてゆきました。

そして、昨年、後輩からの熱烈なりクエストに応え、職場での体験を惜しげもなく披露してくれた長谷川さんの社会人としての晴れ姿は、私にはとても眩く、誇らしいものでした。

## 恩師と学生のこの頃



「自由な  
アイデアを自信に」  
会社員  
長谷川 彩

私は幼少期から様々なことに興味を持ち、ピアノや水泳、スキー等の習い事をやっていたこともあり、好奇心旺盛な性格に育ちました。今考えると、芸術・スポーツビジネス専攻に入った理由はそこと繋がっていたのかもしれない。私の代で二期生でしたが、教育プログラムの今までにはないもので、他の大学では経験できないことが多くありました。

専攻講義では「発想力」や「ビジネストレンド」「地域活性化」というものがありました。具体的に、自身のアイデア・感性を大事にして、発想力を養う講義や、地域活性のために学生のみで実際にイベントを開催する講義です。また、芸術鑑賞やスポーツ観戦を通して、良かった点・改善点をまとめる講義もあり、物事に対して常に客観的な視点を持つ癖が付いたと感じています。

私が宇田川先生の研究室に入ったのは、今までの講義で宇田川先生が学生の自由な発想を大事にしてくださる先生だと感じたからです。研究室の講義でも、学生のみでイベントを立案して実行まで移すものがあ

りました。宇田川先生は学生の発想を一切否定することなく、どんな時も学生の味方でいてくださったのを今でも印象深く残っています。

学生が生き生きと自分のアイデアを活かせるように、そしてそれを染しめるようにしてくださったのだと思います。宇田川先生の言葉は、いつも学生を前向きにさせる、温かく包み込むような言葉でした。そのように先生のもとで日々過ごせたことで、社会人になっても自身でアイデアを生むことや、考えを形にすることに臆せず、前に進めたのだと思います。

私は今、広告営業をしています。営業では、現状を把握することや、その中から課題を想定することが重要となります。学生時代に養ってきた、物事の良かった点・改善点をまとめる考え方は、現状把握や課題想定に役立つ形となりました。

そして、宇田川先生が私たちのアイデアを大事にしてくださったことを思い出しながら、自らのアイデアを自信に変えて日々頑張っています。物事を柔軟に捉え、変化を受け入れていく姿勢は、学生時代に受け入れてくれた宇田川先生のおかげだと思っています。

何年経ってもその姿勢を忘れず、社会人として周りから尊敬される存在になりたいと思います。

## 各学科の活動状況

「実践的な学びの場と授業での創意・工夫」

芸術・スポーツビジネス専攻

宇田川 耕一

芸術・スポーツビジネス専攻では、芸術やスポーツに関連する様々な組織やイベント等の運営について学びます。授業ではグループ活動やプレゼンテーションなど、あくまでも学生が主体による実践的な学びの場が提供されています。

例えば、私が担当する二年生の専門科目である「芸術経営学」では、そうした視点を意識し、WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）日本代表の栗山英樹監督が選手に発した言葉などを題材に、スポーツの監督やオーケストラの指揮者ら指導者の役割などについてグループ・ディスカッションするなど、常に最新の事例を取り上げております。

さて、私が教員として日々接している学生たちは、いわゆるZ世代で生粋のデジタルネイティブ世代です。生まれた時から高速インターネット、スマートフォン、ビデオ・オン・デマンド（VOD）、各種ゲーム機器、そしてSNSが当たり前のよう存在していたので、九〇分間テキストとホワイトボードで一方通行の授業をして、まったく伝わらないとい

う現実があります。そこで、パワーポイントの基本ツールとして用いながらも、映像も適宜取り入れて、視覚・聴覚に訴える授業をしています。

授業で扱う素材も、歴史的な経営学者や経営者だけでなく、より身近な経営者、例えば孫正義氏（ソフトバンクグループ株式会社創業者、代表取締役会長兼社長）等、実生活で学生が密接に接している企業のケーススタディを豊富に取り入れ、飽きさせない工夫を欠かさないように心がけています。

カリキュラムについてご紹介します。一年目では「経営学概論」や「マーケティング概論」など、四年間の学びの土台となるリテラシーを身につけ、二年目では芸術系とスポーツ系併せて七つの研究室に仮配属され、各教員の専門領域を深く掘り下げます。三年生では実際の企業の業務を体験する「インターンシップ」や国内外のビジネスへの理解を深めるための研修旅行である「ビジネスストレンジ」により、本格的にビジネスを学びます。四年目ではこれまでの経験を基に、芸術・スポーツの視点から多種多様な卒業研究を行います。卒業生は金融機関や地方自治体職員など多彩な分野で、地域活性化等の様々な課題に携わっております。

## 「専攻紹介」

音楽文化専攻

藤部 麻実

音楽文化専攻には声楽コース、鍵盤楽器コース、作曲コース、管弦打楽器コース、音楽教育・音楽文化コースの五つのコースがあり、現在一学年から四学年まで一七〇名程度が在籍しております。それぞれのコースには二、四の研究室があり、学生はそれぞれの研究室に所属して活動しています。

授業は実技系の授業では個人レッスンの演習を基本に、必修の授業として合奏、合唱、また専門の授業として室内楽、ピアノアンサンブル、舞台表現演習などの他、理論系の授業として音楽理論、ソルフエージュなどが開講されています。音楽教育・音楽文化コースは、主に教員を目指す、また音楽を文化面から学ぶなど、多様な音楽のアプローチを習得します。

専攻主催の演奏会としてはソロ選抜演奏会、室内楽選抜演奏会、卒業演奏会などを開催し、日々の勉強の成果を地域の皆様に発表できる機会としていきます。

中でも学生主催である定期演奏会は大学が芸術・スポーツの教育課程が集約された時から、岩見沢市市民会館まなみーる大ホールで公演を行います。毎回多くの方にご来場頂いております。吹奏楽、オーケストラ、合唱、室内楽と一年間の集大成の発表

の機会となっております。学生と教員が一丸となって、演奏会の成功のために全力で取り組んでおります。本学が地域連携としての役割もある中で、岩見沢市民の方々の協力を得ながら、専攻では音楽を通しての地域貢献を行っております。

また地域連携の行事として、これまで「ミュージックキャラバン」を行ってまいりました。昨年度は、「北海道教育大学芸術・スポーツキャラバン」と題し函館市で開催されました。その中で吹奏楽・オーケストラのコンサートを開催し、専攻の魅力発信致しました。



その一方で新型コロナウイルス感染症の問題により、数年間、演奏会を十分に行えず、多くの学生が勉強の成果を発表できなかったことは本当に心が痛みました。オンライン配信などを利用して演奏会などを発信してきましたが、やはり音楽の魅力は対面での生の演奏に代わるものはないと思っております。昨年からは殆ど対面での実技レッスン、また演奏会も行えるようになり、地域の皆様とも多くの交流や演奏会を通してご支援を頂き、感謝しております。

「卒業生と在学生の交流が人材育成に」

美術文化専攻

三橋 純 予

アートマネジメント美術研究室は、社会における芸術文化の役割や意義、そして美術や美術教育の新たな可能性について、学生達が体験的に知識や理解を深めていき、自主的な活動を通して、社会と美術文化をつなぐ人材の育成を目的としています。学芸員や教員を目指す学生が入って来ますが、特に美術館学芸員になる卒業生は多く、現在では博物館実習や連携企画などで在生との交流も頻繁にあります。

具体的な活動としては、美術館などの文化施設との連携活動、地域における現代アートプロジェクトなど、学外との連携活動を授業に導入しています。例えば、フランス在住の川俣正氏は、三笠出身で岩見沢東高校卒の世界的な現代美術家ですが、北海道インプログレスVという道内回遊型プロジェクトを市民や学生達と共に道立近代美術館から立ちあげ、三笠の旧美園小学校体育館に入かつ



ての炭鉱町を現代アートでよみがえらせるV大規模なプロジェクトを数年がかりで制作しました。

岩見沢市内でも旧競馬場跡にて制作活動を行い、コロナ禍で活動できない時期もありましたが、十年以上の長期プロジェクトになっています。本学から参加した学生は二百名を越えますが、この時に参加した学生が後に美術館学芸員となって、芸術の森美術館企画として、釧路美術館や函館美術館等の道立美術館への巡回展で、北海道のアートプロジェクトとして紹介してくれました。

また、二〇一六年頃からは、岩見沢市福祉課と連携して、アール・ブリュット(障害者の芸術活動支援)を継続的に行っています。北海道アール・ブリュットネットワーク協議会や、市内の福祉事業所とも密接に連携しながら、創作活動の場をつくることや、展覧会の開催協力を続けています。

コロナ以前には、アール・ブリュット国際フォーラム、国際的なアール・ブリュット展覧会、バラリンピックに合わせた文化庁事業(日本博Vの全国巡回展なども、北海道では岩見沢市が開催地になっており、私の担当する授業などに導入し積極的に協力しました。現在は「アートアカデミー(障害者の卒業後の学びを保障する文科省事業)」に取り組み、今年で三年目になります。福祉課の担

当者は岩見沢校出身者で、後輩にあたるゼミ生と一緒にプログラムを企画実施してくれています。

これらのように卒業生と在学生の交流が人材育成の良い環境となっており、今後も大切にしていきたいと考えています。

「地域とともに歩むスポーツ活動」

スポーツ文化専攻

志手 典之

平成二十六年四月にスポーツ分野は、前身であるスポーツ教育課程をリニューアルし、スポーツ文化専攻になりました。スポーツ教育課程のスピリッツを受け継ぎながら、ブラッシュアップを重ね、ユニークなカリキュラムの下、学生教育を実施し、地域密着型の連携・貢献事業を展開しています。本専攻は、スポーツ・コーチング科学コースとアウトドア・ライフコースの二つのコースから構成され、スポーツの特性を科学的に理解し、地域の人びとの暮らしを豊かにする指導者を養成することを目標とし、現在、十六名の教員で専攻における学生教育および管理・運営をしています。

スポーツ・コーチング科学コースは、地域におけるスポーツ活動の振興、北海道特有のスポーツ活動や障がい者を対象としたスポーツ活動の促進、幅広い年齢層を対象とした健康の増進活動を実践するために、科学的理論に基づいたスポーツ・健康指導の

能力を身につけ、様々な視点から社会に貢献できる学生を育成しています。ヒトとからだの仕組み、健康と体力、スポーツの心理、スポーツスキル向上のメカニズム、トレーニングおよびコーチングの理論・方法など、多角的な観点からスポーツ科学を学ぶとともに、各スポーツ種目における技術・戦術の分析法や指導法を習得し、スポーツを通じた地域支援プロジェクトの取り組みを実践しています。

アウトドア・ライフコースは、「北海道がキャンパス」を合い言葉に、広大な北海道の自然環境の中でアウトドア・アクティビティ、自然体験活動、野外教育、環境教育を通じて、人と自然が共生する暮らしの在り方を探究しています。自然の中に飛び出し、様々なアウトドア・アクティビティを通じて、からだ全体で自然を感じ、自然環境の成り立ちと人間が自然環境に及ぼす影響を理解し、地域の人びとの自然に関わって生きていくための知識や文化を学ぶ場を提供しています。また、自然の中での共同生活を通じて、人と自然の関わりに加え、人と人の関わり方も見つめていきます。そして、学生のうちから教える立場に立つ実践的授業を通じて、それまでに学んできたことの理解を更に深め指導力を高めるといった学びのステップを用意しています。

## 新青陵会員の抱負



「新米記者、勉強中」

空知新聞社 記者  
黒川 雄 星

「プレス空知」という新聞を発行する空知新聞社岩見沢支社で記者をしています。昨年八月末からインタールンで仕事を始め、今年四月に入社。岩見沢市や美瑛市を取材で駆け回る毎日です。

香川県出身で、福原崇之准教授の下で学びたいと芸術・スポーツビジネスマンに進学。在学中は北海道日本ハム球団主催試合でアンケート調査を行ったり、様々なサークル活動に励んだり、充実した四年間を過ごしました。特に自ら創設した芸能サークルの活動は思い出に残っています。私は幼少期から「釣亭黒鯛」の名で落語をやっており、大学でも続けたいと思っていました。

しかし、入学当初は知り合いのいない地域で、どうやって自分の活動を市民に知ってもらおうか悩んでいました。そんなある日、大学の駐車場で「プレス空知」と書かれた車を発見。自分のことを取材してもらいたい、と車の前で待ち伏せ、記者を突撃しました。自分の取り組みを記事にってもらって以降、有難いことに様々な人とつながり、各方面から

連絡をもらえるようになりました。終わってみると四年間で市内外合わせて五十公演を開催しました。現在、その記者が今の支社長、上司に当たります。不思議な縁だなあ、とつくづく思います。

インタールンを含めると約一年記者をしています。学生時代の人脈が仕事に生きているのは本当に嬉しいです。目標は「岩見沢を発信すること」。(もちろん全ての取材を全力でやっていますが) 前述の通り、私は記事にしてみました。前で、学生生活がガラリと変わりました。今度は私が、多彩な個性を持った岩見沢を地域に広げていきたいと強く思います。

また、記者は取材で色々な人に会うことができます。市長や社長、子どもからお年寄り…。仕事を通して見聞が広がります。地域のリアルな声を参考に、在学中に得た知識を発展させ、いずれ地域創生に携わる事業をしたいとも考えています。記者として働きつつ、自身をレベルアップさせていきます。

なお、落語の活動も続けていきます。本稿をお読みの方、出演依頼をお待ちしています(笑)。最後に「新聞記者」と掛けまして、ピザづくりと解く。その心は…。どちらも発行(発酵)した記事(生地)をもっと広げたい!



「いつか、憧れの姿に」

むかわ町立藤川中央小学校  
小林 岳 人

今年の三月に北海道教育大学岩見沢校スポーツ文化専攻を卒業し、四月から胆振管内にある鶴川中央小学校で教諭として勤務しています。現在は、小学校三年生の担任として、子どもたちと楽しく毎日過ごしています。

教諭という仕事は、厳しいこともたくさんありますが、それ以上に成長していく児童の姿を見ると、どこかやりがいを感じているところがあります。学級担任として、まだまだ未熟者ですが、三月まで児童の姿を見守り、行事や授業を通して様々な経験をさせてあげたいと考えているところです。

小学校の教諭を目指しはじめたのは、私が小学生だった時です。楽しそうに働く父の姿、また当時四年生だった私の担任の教諭の姿を見て、いつか私もこのような教諭になるというあこがれを抱いたのがきっかけです。働く環境の過酷さから他の職業を選択することも考えましたが、子どもと関わる一番の仕事だと思い、教諭になることを決断しました。

私が通った小学校は、とても小さい学校で、通っていた時は、全校生徒二十三人の全学級複式の学校でし

た。全校縦割り班で食べる給食や全校レク、また運動会や、学校キャンプ、学芸会などの大きな行事などは、縦のつながりをよくするだけでなく、私に楽しい思い出を残してくれました。振り返ると、あの時の先生方には、たくさんご迷惑をお掛けしてしまいましたが、これもこれから一緒に働く教諭として恩返ししていくことができると考えています。

四年後、私は、日高村という採用枠のため、自身の地元で教諭をすることになります。今までお世話になった先生方と働くことができるということに期待感もありますが、同時に「初任者」という枠がはずれて、自分がやっていけるのかという不安もあります。この不安を払拭するためにも、しっかりと今働いている学校で経験を積み、頑張っていきたいと思っています。

最後に、私は今までたくさんの方に支えられてきました。家族をはじめ、大学の教授、今まで関わってくださった先生方、友人には本当に感謝しています。これからも周りの方々への感謝の気持ちを忘れることなく、その気持ちを児童に伝えられるよう、精進していきます。



## 退職支部長からのメッセージ



「岩教は家族です」  
札幌支部  
佐藤 達也

「岩教（がんきょう）」に通っていた時代のことは、断片的にししか覚えていないというのが正直なところ。四年間、汽車や車を使って札幌から通ったので通学だけに限っても結構な時間を費やしたはずなのに、覚えていたことは車窓からの風景や帰りの汽車で仲間と飲んだことくらい。講義やレポート、ゼミのことはなおさらよく思い出せません。なぜなら私はかなり不真面目な学生だったからです。

くわしく書くと同窓会の会報の内容としてふさわしくありませんので割愛いたしますが、なにしろよく覚えていない、覚えているには恥ずかしいことばかりなので、体がそのように反応しているからでしょう。

細部は覚えてなくても学生時代の日々は、私自身の土台になっていることはまちがいありません。気のいい先輩と後輩たち、個性豊かで愛すべき同期の連中に恵まれた幸せな時間でした。

そして今、その青陵の仲間に加え

られ支部の舵取り役を任されている幸せを感じています。

同窓会活動に携わるようになったのは三十代半ばの仕事も家庭も一番忙しかったころです。同僚の先輩に声をかけられ支部の名簿作成のお手伝いから始めました。二千人を超える名簿の精査、異動の時期には各職場との確認連絡、印刷業者さんとの打ち合わせ、そして「早く名簿できないかなー」と催促の連続。「仕事もあるのにめんどくさいな」と、学生の時のような不真面目な気持ちもありました。

管理的な立場となり、仕事上の困りや悩みの質が大きく変わってきたときに、頼りになったのが同窓のつながりでした。岩教の仲間たちは昔と変わらず、打算もなく見返りも求めずに接してくれる、あたたかさを遣わせない家族みたいな存在です。職場でお互いが青陵と気づくとほとんどの方がにっこりします。時代は変わっても、人を笑顔にさせる岩教の校風を感じさせる瞬間です。これからも同窓の絆が変わらずにつながっていくことを願っています。



「多くの出会いに感謝」  
小樽支部長  
加藤 俊明

私が北海道教育大学に進学したと思ったのは中学校時代です。この頃、俳優の中村雅俊さんが教師役の学園ドラマがテレビで放送されていて、学校の先生って楽しそうと思っただけがきっかけでした。

昭和五十八年に岩見沢分校に入学し、算数・数学研究室（数研）に所属となりました。小樽から通学していたので、サークルなどには入れませんでした。講義では専門教科の難しさに直面しました。この時は高校で文系ではなく、理系に進めばよかったと後悔しました。当時の数研は全学スポ大では、打倒「体研」と気合を入れて先輩方が戦っていたことを今でも覚えています。

教員免許を取得し、昭和六十二年三月に無事に大学を卒業し、後志管内の島牧村の中学校で教員としてのスタートを切りました。教員採用試験は小学校での登録でしたが、中学校で採用となり戸惑いました。その後一般教諭時代の十八年間は中学校で数学や社会を教えました。

中学校では部活動があり、自分が経験しているかどうかは関係なく顧問になり、野球部・卓球部・バレー

ボール部・バドミントン部を担当しました。卓球部以外は学生時代未経験の部活動で、いろいろな方に指導方法等を教えていただきました。

平成十七年に教頭となり、小樽市で勤務することになりました。当時、青陵会小樽支部は管理職の先生が多く、研修会も盛んに行われていました。講師に岩見沢から平川先生をお招きして毎月のように研修会を行っていました。平川先生からいただく資料は、最新の教育情報や管理職として必要なスキルアップに関する内容がぎゅぎゅと詰まっております。いい刺激を与えていただきました。

校長になって現在三校目ですが、これからの変化の激しい時代を生き抜かなければならない子どもたちに、夢や希望をもって生活するよう、機会あることに語りかけています。

数研の同期の仲間とは、コロナ前は年に一度岩見沢や札幌に集まり同窓会を開いていましたが、コロナ禍により中止に。現在はまた集まり始めています。昔の話をしたり、悩みを聞いてもらったりと、数研の仲間たちには本当に感謝しています。

最後になりますが、北海道教育大学青陵会のご発展と会員の皆様の今後益々のご活躍を願っております。



「必然と必要を感じて」  
上川支部  
石川 淳平

随分前のことですが、松下幸之助さんの「この世に起こることは全て必然で必要、そしてベストのタイミングで起こる。」という言葉に触れたことがあります。当時、まだ若かった私は、「そんなオカルトみたいなことがあるものか。」「未来は誰にも分からず、自分で切り拓くものだ。」と思ったものです。今でもほぼそう思っていますが、役職定年という人生の節目を目前にして、否応なしに自らの半生を振り返らなければならぬ状況になりますと、この言葉が頻りに脳裏をよぎり、改めて、その重みを考えさせられます。

岩見沢分校を卒業した私は、上川管内名寄市の小学校に新採用となりました。そこから上川管内で三十数年、全十校に勤務いたしました。たくさんのお子さんたちや同僚との出会いがあり、もちろん、青陵会上川支部の皆様との温かい交流も重ねてまいりました。子どもたちと過ごした色褪せない時間、同僚とともに取り組んだ教育実践、そして、上川支部の諸先輩からの御指導や御支援などが、今の私のアイデンティティを私たち作ってくれ、教職人生の道標と

なつたと思っています。

したがって、私が、ここ上川で生きていくことになり、たくさんのお会いがあったことを単なる偶然だと割り切ることは難しく、その全てに「必要」があったのだと振り返ることができます。つまり、松下幸之助さんが「必然で必要」の言葉に込めたのは、人生におけるどんな選択にも、どんな出会いにも必ず意味があり、それぞれが唯一無二の貴重なできごとであるとの思いだと理解しています。

さて、私事が長くなってしまいましたが、当支部の現状について続きさせていただきます。青陵会上川支部は、OBを含め七十名を超える会員を有しておりますが、現在、校長は私一人、教頭は二人といった大変厳しい状況にあります。また、長く続いたコロナ禍の影響もあって、会員相互の親交は、急速に希薄になっていることを肌で感じます。支部長としての私の任期もあと半年ほどであります。一人一人の支部会員に同窓会の「必要」を感じてもらい、先輩たちが紡いできた「必然」の絆をしつかりと後進に繋げていくことが、私の責務であります。今後とも青陵会上川支部への一層の御厚情と御支援をよろしくお願いいたします。



「心のよりどころ」  
留萌支部  
金山 茂樹

生まれは札幌市豊平の現きたえーるすぐ近く、その後、また白石区だった厚別ひばりが丘で小学生まで過ごし、思春期は北広島市(当時広島町)で育ちました。豊平には市電の大きな終点駅があり、定山溪に通じる拠点でもありました。また、当時の厚別は新札幌副都心のかげらもなく、野犬軍団から悲鳴を上げて逃げながらブレハブ校舎の小学校に通学していました。

札幌の都心からどんどん西へ離れていきましたが、何度も通った月寒にドーム球場ができてプロ野球のフランチヤイズが実現するなど想像すらできず、まして原生林を伐採した分譲宅地がひしめくキタヒロにポールパークができるとは驚きしかありません。時のながれを感じます。

大学進学した岩見沢は、今でも留萌管内から自宅札幌へ帰る際にたまたま通りますが、学生時代のころを彷彿させる佇まいは健在ですね。大学の校舎も住んでいたアパートもそのまま懐かしい風情が気持ちと和ませてくれます。

岩見沢校では硬式野球部に所属してきたおかげで、留萌管内に赴任した中学校では、迷わず野球部の指導に

情熱を燃やすことができました。その中でたくさんのお会いや切磋琢磨した経験は私自身の大切な財産となっています。管理職となつてから、そのエネルギーは「息子の高校野球おっかけ」に代わりました。引越越し・転校の繰り返しで迷惑をかけ続けてしまった家族には感謝いたします。

留萌管内では、赴任した先々の学校で優秀な教職員に恵まれ、充実した教育活動の中で努めることができました。ここ数年は、教科担任として社会科の授業も受けもつことができ、子どもたちとともに学ぶ楽しさを分かち合えています。一般教員時代とは違う「ベテランの味わい」を武器に、「先生の授業おもしろい」と言われる満足感や子どもたちが理解と考察を深めた瞬間の指導者としての達成感は格別です。こうした生の経験は若い教員に実感的に伝えることができました。

退職後は、これまで支えてくれた家族に恩返しするとともに、全く違った仕事をやってみたくも感じています。岩見沢、留萌はこれからも私のかげがえのない「心のよりどころ」として大切にしたいと思えます。



「雄大な  
日高山脈とともに」  
日高支部  
品田 和輝

何も連絡がなく、先行き不安を感じていた三月も下旬、「〇〇日に、日高教育局に来てください。」と待望の連絡があり、早速、地図を広げて所在地を探したり、交通機関等を確認したりしたことが昨日のこのように思い出されます。あれから三十六年の月日が流れました。

私の初任地は、雄大な日高山脈と太平洋に囲まれ、四季折々の美しい風景が広がる、また、夏は涼しく、冬は比較的暖かく雪が少なく、穏やかな気候風土である浦河町の堺町小学校でした。児童数が五百人を超える大規模校で、毎年、公開研究会を開催するような自他ともに認める管内一の研究校でした。そこでは、多くの先輩方からの叱咤激励を受けながら、教員としての基礎・基本を徹底的に叩き込まれた、そんな五年間を過ごしました。

一般教員から教頭、そして、校長へと立場が変わっても、ぶれることなく「研修は学校の生命線」という意識を強くもち続けることができたのは、初任校時代の経験があったからこそと自らの運のよさを実感しているところからです。

その後、一般教員として二校、教頭として四校、そして、現在校長として四校目となります。現任校は二年目で浦河町立堺町小学校。そうです、校長として、教員生活最後の学校として初任校に戻ってきました。

本校は「学校力向上に関する総合実践事業中核校」「地域連携研修主体校」の指定を受け、管内への実践事例の発信や公開研究会の開催等に向けて、三十数年前と変わらず、管内の研究発信校としての自負をもって取組を進めています。そんな中で、教員生活を全うできることを大変幸せに感じているところです。

日高青陵会との出会いは、新採用の年の歓迎会でした。案内をいただき、期待半分不安半分、そんな思いで参加したことが昨日のことのように思い出されます。あれから三十六年、同窓の方々と会の活性化に向けて真剣に考えたり、酒を酌み交わすなど親睦を深めたりしてきたこと全てが素敵な思い出、財産となっています。会員が年々減少し、これからの会の運営は益々難しくなっていますが、会は「研修と親睦」の充実に向けて絆を深めていって欲しいと願っています。



「根室からの風」  
根室支部  
滝 泰英

昭和六十二年四月、根室市内の小学校に着任し、私の教員生活が始まりました。札幌市出身の私には「あまりにも遠い。五、六年で石狩か空知へ戻るんだ！」の思いを抱いてのスタートでした。

根室管内は、若手教員がとて多く、二十代で研修部長を経験し、日本全国の研究推進校の視察に何度も行かせていただき、三十代前半で教務主任を、三十九歳から管理職に昇任させていただきました。

そんな私でしたが、教員六年目、根室の女性と結婚し、「五、六年で戻るぞ！」の気持ちは、楽しく充実した教員生活の中で、「根室の子どもたちのために頑張ろう！」に変わっていききました。以来、根室市、別海町、中標津町、標津町、羅臼町と、根室管内全ての市町で勤務することができました。

根室市ではハリポッターの映画に登場しそうな真っ白なシロフクロウ、別海町では教員住宅の網戸にとまっていたたくさんのホタル、中標津町では学校の玄関前を滑空していたエゾモモンガ、標津町では年に一度の楽しみイクラ給食、羅臼町では

教員住宅の上で夜通し重低音を響かせ鳴っていたシマフクロウ（本当にやかましかった）など、どれもすてきな経験をすることができました。もちろん、おいしいものもたくさん堪能することもできました。

一方、根室支部では、楠瀬功先生、齋藤隆司先生、高橋昭先生など、たくさん先輩たちにお世話になりました。でも、会員数は私が事務局長になった二十年ほど前には四十七名だったのが、今では十数名です。根室管内に赴任した若い青陵会員は、数年で他管内へどんどん流出していくのが現状です。しかし、私たち根室支部では、異動した先で「根室から来た先生には力がある！」と思われようように、最東端から風を吹かせています。三十七年間の教員生活を振り返ると、とても楽しく充実し、あつという間でした。これから根室の未来を担う若者や子どもたちが、この地でどんな夢を紡ぎ、どんなすてきな地域にしていってくれるのかを見るのを楽しみに根室管内で過ごしていきたいと考えております。

北海道青陵会並びに会員の皆様、これまでに出会った全ての皆様には、感謝しかありません。皆様、長い間ありがとうございます。



「もう少し」  
オホーツク支部  
岩瀬 知範

岩見沢校を卒業し、教員としてオホーツクの地で三十五年たちました。オホーツク支部長も二年目を迎えております。私が青陵会に入った時には、管理職の先生方が十三人ほどいらつしやいました。多くの先生方のご指導を受け、今に至ります。他の支部も同じと聞きますが、会員の減少が激しく、現在管理職八名、一般会員七十名ほどです。少ないながらも連絡を取り合い、近況を報告し合っています。オホーツクの特徴としては、雄武小から知床ウトロ学校まで二百キロを優に超えています。とても広く、一堂に会するのは実になかなか大変なんです。

私が支部長として心掛けていることの一つに、人事異動の際に何かとお手伝いできないか、ということがあります。管内異動の際はもちろん、管外異動の時こそ何かしらお手伝いできないかと考えます。オホーツク出身の私としては地元に戻ってきたわけですが、岩見沢校卒業生の多くは、札幌や空知出身の方がたくさんいらつしやいます。「ゆくゆくは地元に戻りたい」という気持ちも十分わかります。そのためには、

希望の地への異動が叶うよう、他管内の青陵支部長の方々と連絡を取り合い、微力ながら異動のお手伝いできればと考えております。

さらに、今年は岩見沢校及び青陵会が一〇〇周年を迎えることは皆さんご存じのことと思います。たくさん卒業生を輩出し、教員に限らず様々な分野で活躍している方もたくさんいらつしやいます。そういった方ともつながることができると青陵会ももう少し発展するように感じます。一〇〇周年の記念行事には多くの方が集まることでしょう。そんな方々とそれぞれの大学時代を語るうち、駅前の焼き鳥屋、循環バスで移動、一律二百円のそば（ゲソ井もありました）、公園での新人歓迎コンパなどなど、懐かしい話をたくさんできたら楽しいだろうとワクワクしています。

いよいよ今年度で定年を迎え、新しい人生について考える時が来ました。正確にはプラス一年で定年となりますが、やってみたいことがあり、仕事はいったん区切りをつけるつもりです。来年の四月からはどんな生活を送っているのか今からとても楽しみにしています。

あらためて青陵会および皆様のご発展、ご活躍をご祈念申し上げます。

平成元年四月、赴任地は後志管内の泊村でした。採用は小学校で受験して中学校、泊村は「原発」のイメージがありましたので、何となく不安な気持ちもありました。

赴任してみると、当時は新卒の先生は珍しかったようで、学校でも地域でも皆さん温かく接してくださり、大切にされているように感じました。生徒も真面目で落ち着いていたため、研修会に多く参加することができ、他校の良い実践を自校用にアレンジすることで自分の授業スタイルの基礎が身についたように感じます。

部活動では、全道大会に出場経験のあるバレーボール部の顧問を任せられ、最初の頃は部活動の時間が最も楽しい時間になっていました。また、地域の人と交流する機会が多くあり、地元の女性と結婚し、親戚や知り合い、家族が増えた充実の八年間でした。

その後、教諭は三校を経験しました。自分は担任への思いが強かったので、管理職になるつもりはありませんでしたが、背中を押してくださいましたのは昨年ご逝去された青陵会の大先輩である巻校長先生でした。巻先生は、社会情勢や教育改革の変化、

### 先輩を訪ねて

～「出会い」と「つながり」～

## 豊田 一正氏

(外国語研究室 平成元年卒)



管理職としての心構えなど、多岐にわたりのいろいろなことを丁寧に教えてくださり、管理職になってからも参考になることが多くありました。教頭は三校を経験しましたが、どの学校でもやや大きめの生徒指導があり、特に一校目では初期対応が遅れ、保護者対応で辛い時間が続きました。「先生に戻ろうかな」とも思いましたが、教職員と力を合わせ、粘り強く取り組んだ結果、理解を得ることができ、本当に良い経験や勉強になりました。

まだ教職は続きますが、振り返ると自分は職場や地域に良い「出会い」や「つながり」があり、「運が良いなあ」と思っています。

さらに今年度は、一般時代に勤務した学校に赴任しました。苦しいことも嬉しいことも経験し、最も学びが多かった学校です。保護者になった当時の生徒と再会を果たすこともでき、おそらく最後の異動と考えると「運が良いなあ」と改めて感じます。

先輩の皆様は私のように「運」だと考えるのではなく、「出会い」や「つながり」を大切に、確実に上手に捉え、活躍されることを願っています。

学生活動支援事業

大学連携部長

江 幡 佳 代

大学連携部では、母校の発展や本学学生による芸術やスポーツ活動を通じた地域貢献活動を支援するため、平成二十二年度から学生活動支援事業を実施し、今年度で十三年目を迎えます。また、幅広い支援を行えるよう、令和元年度から一般申請枠を新設しました。

昨年度まで新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、学生活動については見通しが持てないところもありました。今年度は、学生活動も制限がほぼなく行えますので、三年ぶりとなる対面での学生幹事会などを予定しております。感染症対策は講じつつ、計画に沿って今年度の事業を進めてまいります。

昨年度の本事業で支援した専攻二団体と一般枠一団体の活動の様子をご紹介します。いただきます。

〈美術文化専攻〉

活動名「修了・卒業制作展」

岩見沢会場（まなみーる）と札幌会場（大丸藤井セントラルスカイホール）で制作展を開催しました。コロ

ナ禍の中、制作や研究を行い、自分の表現を追究した学生達の姿が表れた展覧会となり、美術の面白さや楽しさ、可能性を感じていただく貴重な機会となりました。

〈音楽文化専攻〉

活動名「定期演奏会」

昨年度も、授業の成果を発表する場として、岩見沢と札幌で定期演奏会を開催することが出来ました。学生が作曲した作品など、盛りだくさんのプログラムで観客に素晴らしい演奏を届けました。

〈一般枠〉

活動名「北教大岩見沢校YOSA KOI」

活動規制が緩和され、岩見沢や札幌のイベントを中心に、多くの演舞機会に恵まれました。学年や専攻の違いを超えたコミュニケーションをとりながら活動を進めています。市民をはじめ多くの方に感動と元気を与えています。

以上の活動に対し、昨年度、約二十五万円を支援しました。なお、原資は会員の皆様からいただいた基金への寄附で賄っております。会員の皆様のご理解と学生活動支援基金へのご寄附をお願いいたします。

編集後記

会報第一二号をお届けいたします。

今号からは、年一回の発行となっておりませんが、大学と青陵会の一〇〇周年記念式典に先駆けて発行したいという思惑があったため、執筆者の皆様には、新年度がスタートしてから間もない時期でのご依頼となってしまうかもしれません。お忙しい中にもかかわらず、玉稿をお寄せくださいました皆様には、心より感謝申し上げます。お陰様を持ちまして、ほぼ計画通りに発行することができまことに、この上ない喜びを感じております。

なお、「退職支部長のメッセージ」のコーナーについては、役職定年を迎える方を対象に、ご寄稿の声をかけさせていただいており、次年度以降もそのようにしたいと考えておりますので、ご理解いただきたく思います。よろしくお申し込み申し上げます。

さて、一〇〇周年記念の式典当日まで、あと一か月余りとなり、いよいよ式典開催の機運が高まってまいりました。記念事業の公認ロゴも、岩見沢

北海道教育大学 岩見沢校100周年 地域と共に歩み、共に成長 ~往古来今~



北海道教育大学岩見沢校・北海道教育大学青陵会

校の学生である、瀬尾涼音さん・朝日見帆さん・大塚里央奈さん三人の手により完成致しましたので、ここに紹介いたします。

ロゴマークには大きさや色の加工など、使用のルールがございませぬので、お使いになりたい方は、「創立一〇〇周年を祝う会」実行委員会総務部（岩見沢市立光陵中学校 3階・22号室）の藤田理事長までお問い合わせください。

《広報・情報発信担当》

・部長 林 宏和

・副部長 神島 亘基 (上砂川中学校)

・副部長 渋谷 憲一 (豊沼小学校)

・副部長 渡谷 憲一 (妹背牛小学校)

・部員 一ノ瀬 健太郎 (三笠岡山小学校)

・部員 小野寺 英樹 (滝川江陵中学校)

・部員 沢 泰宏 (岩見沢第一小学校)

・部員 笠井 賢吾 (千歳緑小学校)